

付属語「きり」の用法の変遷について：江戸語・東京語を中心に

著者	渡邊 ゆかり
雑誌名	日本語科学
巻	12
ページ	128-152
発行年	2002-10
URL	http://doi.org/10.15084/00002094

付属語「きり」の用法の変遷について

——江戸語・東京語を中心に——

渡邊 ゆかり

(広島女学院大学)

キーワード

きり だけ しか 付属語 派生

要旨

近代以降に見られる付属語の「きり」の用法には、付属語の「きり」が現れたとされる近世前期上方語に存在しない用法があり、逆に、近世前期上方語において存在していた付属語の「きり」の用法の中には、近代以降見ることのなくなった用法も存在するが、付属語の「きり」の用法がどのようにして近世前期上方語に見られる用法から近代以降に見られる用法へと変遷していったのかについてはこれまでのところ具体的に考察されていない。従って、本研究においては、文学作品等から収集した表現例をもとに、付属語として用いられる「きり」の用法の変遷について考察を行った。その結果、付属語「きり」は、近世前期においては、主に体言句に後接して修飾成分を構成し、被修飾成分が表す事物の存在が許されている、あるいは義務付けられている期限を表すのに使用されていたが、時代が下るにつれて意味が拡張していき、近代以降には、限定の意味を含んだある種の属性を表す用法が現れたことなどが明らかとなった。

1. はじめに

現代においては「きり」という形態素は、次の(1)のように自由形態素として使用される場合と(2)-(6)のように拘束形態素として使用される場合とがあり、後者のうち(4)-(6)は、(2)、(3)とは異なり、付属語的な役割を果たしている¹。

- (1) きりが悪い。
- (2) 爪きりをさがす。
- (3) 父は母に家計を任せきりだ。
- (4) 彼は一人きりで生活している。
- (5) 彼は部屋の中に閉じこもったきりだ。
- (6) 彼は家を飛び出して行ったきり帰ってこない。

(4)-(6)のような付属語性の高い「きり」の用法やその変遷については、すでに湯澤(1936)、湯澤(1954)、此島(1966)、根来(1967)、倉持(1969)などに概述されているが、各々の用法間に存在する派生関係の在り方については詳細には述べられていない。例えば、(4)-(6)のような「きり」の用法は、付属語性の高い「きり」が発生したとされる近世前期の作品にはまだ見られないが、これらの用法がどのようにして派生していったのかについてはこれまでのところ言及されてはい

ない。

また、「きり」の用法には(4)のように限定を表す「だけ」と知的意味を変えずに交換可能な用法があるとされている(cf. 倉持)が、如何なる場合に限定を表す「だけ」と交換可能であるのかについては明らかにされていない。また、筆者の母語直感に基づけば、少なくとも現代語においては、次の(7)のように限定を表す「だけ」を「きり」に交換することが可能な場合と(8)のように限定を表す「だけ」を「きり」に交換するとやや不自然になる場合とがあるが、この理由についても、今のところ説明されてはいない。

(7) その秘密を知っているのは、花子と太郎の二人 {だけ/きり} だ。

(8) 先生は、花子と太郎の二人 {だけ/?きり} に宿題を与えた。

従って、本研究においては付属語性の高い「きり」(以後付属語「きり」と称す)について、上記の問題点を明らかにすることを目的としている。

なお、本研究においては、考察対象となる付属語「きり」の用例収集にあたり、辞書や先行研究に記載されていた用例以外に、文部科学省大学共同利用機関国文学研究資料館がインターネット上で試験公開(要登録)している日本古典文学作品本文データベース²及び、CD-ROM版の「明治の文豪」、「大正の文豪」、「新潮文庫の100冊」、「新潮文庫絶版100冊」、及びインターネット上で公開されている青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)を利用した。また、本稿においては、「きり」と同様な用いられ方をする「つきり」や「ぎり」も「きり」と同等のものとして扱うこととする³。

2. 付属語「きり」の発生

湯澤、此島、倉持によれば、付属語の「きり」は、近世上方語において発生したとされており、前期上方語では、次の(9)、(10)のように、時を表す名詞や「これ」などにつくだけで今日のように自由に種々の語に後接しないが、後期江戸語では、(11)、(12)のような連体形で終わる用言に後接する例が見られるということである。

(9) 壱万八千貫目の借銀、十年切の年賦にして (西鶴織留・二・一)

(10) サア鬼王殿、うき世は是ぎりぼつつめて (曾我扇八景・下)

(11) 卵塔場へ往きはいつたが幼稚のうち参つたつきりだから (七偏人・五・下)

(12) ちよつくり顔をだしたぎりで、今じぶん来やアがつて (通言東至船)

付属語の「きり」の語源については、湯澤(1936)は、「これは限りから出た語らしく(p. 550)」と述べており、此島(p. 254)は、動詞「きる(限る)」を語源とするとしており、根来(p. 113)、倉持(p. 521)は、動詞「きる(限る)」が名詞化した「きり(限り)」から転じたものであるとしている。湯澤、此島、根来、倉持は、「限」という漢字をあてる動詞「きる」、もしくは、これが名詞化したものから付属語「きり」が派生したと考えているわけであるが、近世における付属語「きり」に漢字が当てられる場合には、「切」の漢字が当てられる場合と「限」の漢字が当てられる場合の二通りが存在する。著者の管見する限りでは、このような表記上の相違と用法上の相違との間に相関性は見られない。従って、後述のように近世初期において付属語「きり」が主に「何が許されている、あるいは義務付けられている時間的範囲」を表すのに使用されていること、『時

代別国語大辞典 室町時代編二』の記述によると室町期に「切」という漢字が「時間に、一定の区切りや期限を設ける。(p. 623)」という意で使用されていること⁴、同じく『時代別国語大辞典

室町時代編二』の記述によると室町期に「限」という漢字が「存続する事態に対して、一定の時間的制約の範囲をもうける。(p. 110)」という意で使用されていること⁵などを併せて考えると、付属語「きり」と「限」という漢字をあてる「きる」、「きり」との関係性は否定できないものの、付属語「きり」の語源を「限」という漢字をあてる「きる」、「きり」のみに特定する考え方については検討すべき余地があるものと思われる。この問題に関しては、今後の研究課題とし、以下3では、近世における付属語「きり」の用法について、4では、近代以降における付属語「きり」の用法について考察を行う。

3. 近世における付属語「きり」

3.1. 体言句後接型

日本古典文学作品本文データベースの中で、近世の物語、説話・小説、劇文学のジャンルに分類されている104作品（以下「古典104」と略称する）について付属語「きり」の延べ語数を調べてみたところ、79語あり、このうち体言句に後接するものは延べ73語あった⁶。この延べ語数は、付属語「きり」の延べ語数の約92%に相当する。

次に、「古典104」における体言句後接型の付属語「きり」が文中の如何なる成分の直接構成要素として使用されているのか、また「きり」を直接構成要素とする成分が如何なる構文的意味を表しているのかについて調べたところ、以下の表1のような結果となった⁷。なお、表中、ならびに以下の記述において‘ ’と‘ ’で括られている成分からなる単位は、‘ ’で括られている成分が表す事物を示すものとする。また、〈 〉は〈 〉で括られた成分が述語にかかる成分であることを示すものとする。

表1 「古典104」における「体言句+きり」の文法的特徴^{8,9}

		統語的環境	構文的意味
連用 修飾 成分	付加 成分	連用1 〈〜ガ〉+〈〜キリ/キリニ/キリガ〉+述部	‘〈〜ガ〉+述部’の存在が許されている、あるいは義務付けられている時間的、数量的範囲
		連用2 〈〜ガ〉+〈〜キリ/キリニ/キリデ〉+述部	ある特定のスキーマ的命題を具現化した‘〈〜ガ〉+述部’が成立する直前の時点
	必須 成分	連用3 〈〜ガ〉+〈〜ヲ〉+〈〜キリト〉+胸算用ヲ+極メル	‘〈〜ヲ〉’の存在が許されている時間的範囲
		連用4 〈〜ガ〉+〈〜ヲ〉+〈〜キリニ〉+スル	‘〈〜ヲ〉’の存在が許されている時間的範囲
		連用5 〈〜ガ〉+〈〜キリニ/キリト〉+ナル	‘〈〜ガ〉’の存在が許されている、あるいは状況的に可能な時間的範囲
		連用6 〈ソレキリガ〉+今日キリ	‘今日キリ’に相当する、「ソレ」が指示する何かの存在が許されている時間的範囲

連体修飾成分	連体1 ～キリノ+被連体修飾成分	‘被連体修飾成分’の存在が許されている,あるいは義務付けられている,あるいは状況的に可能な時間的, 数量的範囲
	連体2 ～キリノ+被連体修飾成分	‘被連体修飾成分’の属している順番的範囲
述語成分	述語1 〈～ガ〉+～キリ	‘〈～ガ〉’の存在が許されている,あるいは義務付けられている,あるいは身体的に可能な時間的, 数量的範囲
	述語2 〈ソレキリガ〉+今日キリ	‘ソレキリ’に相当する時間的範囲

「古典104」中の近世前期(1603～1715)¹⁰における各用法の「きり」の延べ語数とこの合計を分母とした場合の出現頻度は,以下の表2の通りであり,「古典104」全作品中における各用法の「きり」の延べ語数とこの合計を分母とした場合の出現頻度は,以下の表3の通りであった。なお,表中の()の中の数値は,数量的範囲を表す語の延べ語数を示している。また,出現頻度の%の小数点第1位以下は四捨五入した。

表2 「古典104」近世前期作品中における表1の各用法の「きり」の延べ語数と出現頻度

	連用1	連用2	連用3	連用4	連用5	連用6	連体1	連体2	述語1	述語2	計
延べ語数	13語 (2)	6語 (0)	1語 (0)	1語 (0)	0語 (0)	1語 (0)	8語 (0)	1語 (0)	2語 (0)	1語 (0)	34語 (2)
頻度	38%	18%	3%	3%	0%	3%	24%	3%	6%	3%	—

表3 「古典104」全作品中における表1の各用法の「きり」の延べ語数と出現頻度

	連用1	連用2	連用3	連用4	連用5	連用6	連体1	連体2	述語1	述語2	計
延べ語数	16語 (3)	13語 (0)	1語 (0)	2語 (0)	6語 (0)	1語 (0)	11語 (1)	2語 (0)	20語 (3)	1語 (0)	73語 (7)
頻度	22%	18%	1%	3%	8%	1%	15%	3%	27%	1%	—

各類の表現例は以下の通りである。

連用1

- (13) 客しげき内へ三十日切にやとはれて, (好色一代女・五・一)
(14) 明日ぎりに商の勘定もしまはんと得意廻りて打過ぎたり。 (曾根崎心中)
(15) 瀬多の久三が筒の時百切張って見たれば。 (丹波與作待夜の小屋節・中)
(16) 己も一分ぎりがのまふ (助六)

連用2

- (17) 年籠の夜, 大原の里にて盗し女に馴初, 二十五の六月晦日切に米櫃は物淋しく,

(好色一代男・三・九)

(18) あれぎり居所が知れぬ故、常不斷旦那様と噂さ斗りしていたわいの。

(小袖曾我薊色縫・第二番目・序幕)

(19) それだけれど、わたしがやうなものだから、もうこれぎりでお出なんすめへね。

(洒落本 傾城買四十八手・一)

連用 3

(20) 錢のないときは肴も買ぬがよし、諸事を五節供切と胸算用を極め、

(世間胸算用・五・二)

連用 4

(21) 壱石につき四十五匁の相場の米を、三月晦日切にして五十八匁に定め、

(世間胸算用・四・三)

(22) 心にいちもつあるゆへ、これぎりにしようとする。

(東海道中膝栗毛・八・中)

連用 5

(23) いつお目に掛られるか、是切になるか知れぬ故、

(小袖曾我薊色縫・第一番目・四立目)

(24) 形も容もいとひなく、最是ぎりになることかと、

(春色辰巳園・十)

(25) そりやおともぞろへとさはぎたつ御どうぜいにつれて、けんくはもそれぎりとなり、

(東海道中膝栗毛・四・上)

連用 6

(26) それはお悦びなされませふが、其切が則今日切で、

(傾城壬生大念仏・中)

連体 1

(27) 三十日切の手掛者にはあらず

(好色一代女・一・目録)

(28) 中の島のそうぶつ物も昨日限の約束

(重井筒・上)

(29) 手附限の事である。いっそおれ買ましょか。

(新版歌祭文・下・油屋の段)

連体 2

(30) 四五年のうちに江戸三番ぎりの兩替になる事、

(日本永代藏・六・二)

述語 1

(31) 高尾、此世の縁は是切、未來で添ふ。

(韓人漢文手管始・四)

(32) うちどめに屁が出たから、もふ小便はそれぎりじやわいな

(東海道中膝栗毛・六・下)

(33) 酒も數を定められ三盃限り。(省略)

焼物は室の酢煎それも二つ切。

(心中宵庚申・上)

述語 2

(34) (= (26) に同じ)

それはお悦びなされませふが、其切が則今日切で、

(傾城壬生大念仏・中)

まず、表 2 より、近世前期においては、連用 1、連体 1 が他の用法より顕著に現れていること

がうかがえる。連用1，連体1は，いずれもこれらが修飾する被修飾成分が表す事物，すなわち‘〈ガ格〉+述部’，‘被連体修飾成分’の存在が何らかの取り決めにより許されている，あるいは義務付けられている時間的，数量的範囲を表していた。例えば，(13)の「三十日切」は，‘客しげき内へやとはれて’の存在が何らかの取り決めにより許されている，あるいは義務付けられている時間的範囲を，(27)の「三十日切」は，‘手掛’の存在が何らかの取り決めにより許されている，あるいは義務付けられている時間的範囲を表している。また，時間的範囲を表す場合と数量的範囲を表す場合とは，時間的範囲を表す場合の方が圧倒的に多かった。

従って，近世前期においては，「体言句+きり」は，主に，修飾成分として現れ，‘被修飾成分’の存在が何らかの取り決めにより許されている，あるいは義務付けられている時間的範囲，すなわち期限を表していたと考えられる¹¹。

次に，表3より出現頻度が10%を超えている類は，連用1，連用2，連体1，述語1であり，これらのうち連用2を除く連用1，連体1，述語1は，これらと属性¹²・属性主体という意味関係にある‘〈ガ格〉+述部’，‘被連体修飾成分’，‘〈ガ格〉’の存在が許されている，あるいは義務付けられている，あるいは身体的，状況的に可能な時間的，数量的範囲を表していた。例えば，(25)の「それぎり」は，‘けんくは’の存在が状況的に可能だった時間的範囲を，(32)の「それぎり」は‘小便’の存在が身体的に可能な数量的範囲を表している。

従って，近世全般を通して見た場合は，「体言句+きり」は，主に属性を表す成分として現れ，これと属性・属性主体という意味関係にある成分が表す事物の存在が許されている，あるいは義務付けられている，あるいは身体的，状況的に可能な時間的，数量的範囲を表す場合に使用されていたとみることができる。

また，表3において出現頻度が3番目に高かった連用2の「体言句+きり」については，以下に示すAかBのいずれかのスキーマ的命題を具現化した事態を表す文の付加成分として現れ，この事態が成立する直前の時点を表している。

[連用2の「体言句+きり」を付加成分とする文に内在するスキーマ的命題]

- A. 何かがある特定の空間から消失する，あるいは消失している
- B. ある特定の動きが途切れる，あるいは途切れている

例えば，(17)の「二十五の六月晦日切に」はAを具現化した‘米櫃は物淋しく’が成立する直前の時点を表している。また，(19)の「これぎり」は，Bを具現化した‘お出なんすめへ’が成立する直前の時点を表している。

連用2の「体言句+きり」は，連用1の「体言句+きり」と同じく付加成分として現れるが，構文的意味は連用1のそれとは異なっている。しかしながら連用2の「体言句+きり」は，‘〈ガ格〉+述部’の成立と関わる時間的境界を示しているという点において連用1の「体言句+きり」と類似しており，また，表2より，付属語「きり」が現れ始めた近世前期においては，連用2よりも連用1の「体言句+きり」の方が使用頻度が高いことから連用2は連用1から派生された可

能性が高い。

以上、近世における、体言句後接型の「きり」の用法について見てきたが、連用1から述語2までのうち、連用1の「体言句+きり」は、「古典104」における近世後期（1765～1867）の作品には見られず、「明治の文豪」、「大正の文豪」、「新潮文庫の100冊」、「新潮文庫絶版100冊」においても存在しない。これに対し、連用2の「体言句+きり」は、「古典104」における近世後期の作品、及び、「明治の文豪」、「大正の文豪」、「新潮文庫の100冊」、「新潮文庫絶版100冊」においても存在する。従って、付加成分として現れる「体言句+きり」のうち、連用2の「体言句+きり」は近世以降も存続したが、連用1の「体言句+きり」は、近世中期以降衰退していったものとみることができる。

3.2. 用言句後接型

用言句後接型には、「有」、「あり」に後接するもの4語と動詞のタ形に後接するもの2語が存在した。「古典104」における出現頻度は、前者が約5%、後者が約3%と体言句後接型の出現頻度に比べると極めて低い。また、先行研究ですでに指摘されていることであるが、動詞のタ形に後接するものについては、近世後期江戸語の作品にしか見られない。

以下、まず、近世前期の作品にも見られる「有」、「あり」に後接する「きり」について見ていく。「有」、「あり」に後接していた4語の表現例は以下の通りである。

(35) 此有切に、五人口を過よ。 (日本永代蔵・二・二)

(36) ならちやをあり切さらさらとしてやり (東海道中膝栗毛・初)

(37) あにがハア身上ありぎり、箱どものウ仕入たとおもはつしやい
(東海道中膝栗毛・二・下)

(38) あれば有限つかふといふ所さネ (浮世風呂・四・上)

(35)-(38)の「～きり」は、「ガ格+述部」の存在が許されている数量的範囲を表している。例えば、(35)の「有切」は、「五人口を過」の存在が許されている数量的範囲を表している。

従って、両者は互いに派生関係にあると同時に、前者は表1の連用1と派生関係にあるとみることができる。

次に、近世後期の作品において見られるようになる、動詞のタ形に後接する「きり」について見ていく。動詞のタ形に後接する「きり」については以下の2例が存在した。

(39) あんまり何角を氣兼をして、煩ふなヨト云た切、歸つて行ましたはトすこしふさぐ
(春色辰巳園・五)

(40) 左様でござりましたか。これも旅で別れたぎり故、どこに今はござんすやら、居所さへも存ませぬわいな。
(小袖曾我薊色縫・第二番目・序幕)

これらのうち(39)の「きり」は、キリ節補文とキリ節に従属される文とを何らかの意味関係のもとに繋げる接続助詞的な働きをしており、(40)の「きり」は、「きり」に前接するキリ節補文とキリ節自体を補文とする独立性の高い節を構成する接続助詞との間に現れ、付加的命題を表す副助詞的な働きをしている。

前者の「きり」については、「古典104」以外の近世の作品において、次の(41)のような表現例が存在した。

(41) 何ものやら後から当つたとばかり思ふたぎり、めがまふたれば

(傾城勝尾寺・二段目)

前者においては、キリ節補文のガ格とキリ節に従属される文のガ格は、(39)のように同じであるか、もしくは(41)のように全体・部分という意味関係にある。また、(39)のキリ節に従属される文は以下に示す[キリ節に従属される文に内在するスキーマ的命題]のAを、(41)のキリ節に従属される文は同じく[キリ節に従属される文に内在するスキーマ的命題]のBを具現化した事態を表し、(39)、(41)のキリ節はこのような事態が成立する直前の時点を表している。

[キリ節に従属される文に内在するスキーマ的命題]

- A. 何かがある特定の空間から消失する、あるいは消失している
- B. ある特定の動きが途切れる、あるいは途切れている

例えば、(39)の「あんまり何角を氣兼をして、煩ふなヨト云た切」は、Aを具現化した「歸つて行きました」が成立する直前の時点を表している。また、(41)の「何ものやら後から当つたとばかり思ふたぎり」は、Bを具現化した「めがまふた」が成立する直前の時点を表している。

このような「きり」の用法は、3.1で示した表1の連用2から派生された可能性が高い。なぜなら、上記の[キリ節に従属される文に内在するスキーマ的命題]は、3.1で示した[連用2の「体言句+きり」を付加成分とする文に内在するスキーマ的命題]と一致しており、キリ節は、連用2の「体言句+きり」と同様、このようなスキーマ的命題を具現化した事態が成立する直前の時点を表しているからである。

次に、後者の「きり」についてであるが、このような「きり」については、「古典104」以外の作品において、2で見た(11)、(12)のような表現例が存在した。(40)、(11)、(12)のキリ節は、次のような付加的命題を具現化した命題を表している。

[キリ節が表す付加的命題に内在するスキーマ的命題]

- A. ‘キリ節補文’ 成立時まである空間に存在した何かがその空間から消失する、あるいは消失している
- B. ‘キリ節補文’ 成立時まで存在したある特定の動きが途切れる、あるいは途切れている

例えば、(40)の「旅で別れたぎり」は、「旅で別れた」時まで話者の存在空間に存在したある人物がその空間から消失しているという、Aを具現化した付加的命題を表している。また、(11)の「幼稚のうち参つたきり」は、「幼稚のうち参つた」時まで存在した卵塔場へ参るという行動が途切れているという、Bを具現化した付加的命題を表している。

上記のスキーマ的命題の点線部は、先に示した〔キリ節に従属される文に内在するスキーマ的命題〕と一致していることから、(40), (11), (12) のような副助詞的な「きり」は、(39), (41) のような接続助詞的な「きり」から派生された可能性が高い。

なお、動詞タ形後接型のこれら2種の用法は、近代以降にも引き継がれていく。

4. 近代以降における付属語「きり」

4.1. 体言句後接型

4.1.0. 近代以降における体言句後接型の「きり」の変種

近代以降の文学作品において使用が認められる「体言句+きり」には、以下のような変種が存在する。

ア類 3.1であげた表1の連用2と同じ働きをするもの。

イ類 3.1であげた表1の連用4, 連用5, 連体1, 述語1の延長上にあるもの。

ウ類 「其他否定」¹³を表す副助詞「しか」と関わりの深いもの。

エ類 「体言句+きり」とある特定の意味関係にある‘成分x’についての4.1.4であげるスキーマ的命題Xを具現化した属性を表すもの。

オ類 「体言句+きり」とある特定の意味関係にある‘成分x’についての4.1.5であげるスキーマ的命題Yを具現化した属性を表すもの。

カ類 「体言句+きり」とある特定の意味関係にある‘成分x’についての4.1.6であげるスキーマ的命題Zを具現化した属性を表すもの。

以下、各級の用法について順に具体的に見ていく。

4.1.1. ア類：表1の連用2と同じ働きをする「きり」

ア類の表現例としては、以下の(42), (43)のような表現例が存在した。

(42) お増も今年きりで下ったとの話でいよいよ話相手もないから、 (井伏鱒二「黒い雨」)

(43) 彼女はその画家のことはそれきり何にも話さなかったが、 (堀辰雄「風立ちぬ」)

これらにおいては、「体言句+きり」を付加成分とする文は、3.1であげた〔「体言句+きり」を付加成分とする文に内在するスキーマ的命題〕のA, もしくはBを具現化した事態を表しており、「体言句+きり」は、このような事態が成立する直前の時点を表している。

また、近代以降の作品においては、「体言句+きり」が〔「体言句+きり」を付加成分とする文に内在するスキーマ的命題〕を具現化した事態が成立する直前を換喩的に表している、次の(44)のような表現例も存在した。

(44) 「私、もうあの人きりで止そうと思つているの。あの人と切れたら女中奉公してもいゝから、妾なんかになりたくない」と、手強く云つた。 (正宗白鳥「微光」)

具体的に示すと(44)の「あの人きり」は、連用2の〔「体言句+きり」を付加成分とする文に内在するスキーマ的命題〕のBを具現化した‘私もう止そう’が成立する直前の時点を換喩的に表している。

4.1.2. イ類：表1の連用4，連用5，連体1，述語1の延長上にある「きり」

イ類の表現例としては、以下の(45)-(50)のような表現例が存在する。

必須的連用修飾成分

- (45) 月の初めから正午ぎりになっていたが、前期の日課点を調べるので、教員共は一時間二時間を教室に残った。(田山花袋「田舎教師」)
- (46) 午飯を食ってから、三重吉に手紙を書こうと思って、二三行書き出すと、文鳥がちらと鳴いた。自分は手紙の筆を留めた。文鳥がまたちらと鳴いた。出てみたら粟も水もだ**いぶん減**っている。手紙はそれぎりにして裂いて捨てた。(夏目漱石「文鳥」)

連体修飾成分

- (47) きぬぎぬの売女の、ことに一夜きりの附合のやつ、(石川淳「かよい小町」)
- (48) その手紙は、締切りの期日をきめた原稿注文というのではなく、その前触れのかたちで、ユニークな内容のエッセイを所望するという意図を丁寧に説明したものであった。そして、一回きりの執筆ではなく、(青山光二「われらが風狂の師」)

述語成分

- (49) どうかすると、そういう霧がずんずん薄らいで行って、雲の割れ目から董色の空がちらりと見えるようなこともあったが、それはほんの一瞬間きりで、霧はまた次第に濃くなって、(堀辰雄「美しい村」)
- (50) いくら文明開化の今日だからって、人間の口は一つきりだ。一対一なら、負けはしないよ。(山本有三「路傍の石」)

これらにおいては、「体言句+きり」は、属性を表す成分として現れ、これらの成分と属性・属性主体という意味関係を結んでいる成分の表す事物の存在が許されている、あるいは義務付けられている、あるいは状況的、身体的に可能な時間的、数量的範囲を表している。

従って、上記の「きり」は限定の意を含んでいるので、「きり」に前接する体言句が時間的範囲における、最終時点のみを表しており全体的範囲を表していない(45)、(46)を除いた(47)-(50)の「きり」については、限定を表す「だけ」と交換しても意味的な差異はほとんどない。

4.1.3. ウ類：「其他否定」の「しか」と関わりの深い「きり」

「其他否定」を表す「しか」は、後期江戸語において現れたとされている(cf. 此島：p.256, 阪田1969：p.548, 山口1991：p.45)が、ウ類の表現例には、この「其他否定」を表す「しか」に前接するものと、「其他否定」を表す「しか」と同等の働きをする「きり」の2種類が存在する。以下の(51)、(52)は前者の、(53)、(54)は後者の表現例に相当する。

- (51) やあと云った。湯の中ではそれぎりしか口を利かなかった。(夏目漱石「長谷川君と余」)
- (52) 誰もいず、七瀬はうすく埃をかぶった電話一台きりしか載っていない粗末な机の横の小さな椅子に腰を掛けた。(筒井康隆「エディプスの恋人」)

(53) 始業のかねがなつたので、みんなとわかれた先生は、職員室にもどりながら、仁太のこと {きり/シカ} 考えていなかった。
(壺井栄「二十四の瞳」)

(54) これはねえあなた、ぼくの発明した機械で、日本に一つ {きり/シカ} ない。
(北杜夫「楡家の人びと」)

『方言文法全国地図1』51図(調査時期:1979-1983)¹⁴においては後者の用法の使用分布は、東国方言圏に集中しており、前者の用法も、使用地点数は後者の用法よりはるかに少ないながらもそのほとんどが東国方言圏に存在する。従って、これらの用法は、東国方言圏内において成立したもののその使用域は東国方言圏内にとどまり、全国的な共通語としての地位を獲得するまでには至らなかったものとみることができる。また、前者の用法と後者の用法の具体的な成立時期については、大橋(1990)は、『関東地方域方言事象分布地図』Map 136(調査時期:1966-1969)¹⁵における各々の「きり」の分布状況から前者の用法は後者の用法に先行して現れたと推定しており、宮地(1997)は、各々の「きり」が現れるようになる作品年代より、前者の用法は近世末期頃に、後者の用法は明治時代末期頃に現れたと推定している。さらに、『東京都言語地図』文法12図(調査時期:1985)¹⁶の後者の用法の使用分布では、老年層では「使う」がほとんどであるのに対し、若年層では、「使わない」が「使う」を上回っていることから、東京都においては、現在では後者の用法は衰退の傾向にあるとみることができる。

次に、これらの用法が派生された意味的な理由について考える。

まず、前者の「きり」が派生された意味的な理由としては、近世における体言句後接型の「きり」が何かの時間的、数量的範囲を表すという点において限定の意味を含んでいたため、「その他を否定することによる反転的な限定(山口:p.36)」を表す「しか」と結びつき、反転的に限定されるものの存在を際立たせる働きをもつようになったという理由が考えられる。

次に、後者の「きり」が現れた意味的な理由としては、以下の二つが考えられる。一つは、「きりしか」の「きり」が有していたと思われる「しか」によって反転的に限定されるものの存在を際立たせるという補助的意味機能が次第に薄れ、「きりしか」全体で「其他否定」を表すようになった後、「しか」が省略されるようになり、「きり」が単独で「其他否定」の意味機能をもつに至ったという理由である。もう一つは、3.1であげた連用2の「きり」はいわば「其後否定」を表していることから、意味拡張により「其後否定」の「其後」を「其他」に置き換えた「其他否定」を表す「きり」が現れたという理由である¹⁷。「しか」と同等の働きをする「きり」の派生には、これら二つの理由がともに関係しているものと考えられる。

なお、「しか」は、「行くしかない」のように用言句に後接する場合もある。『東京都言語地図』文法15図(調査時期:1985)¹⁸の使用分布では、このような用言句に後接する「しか」と交換可能な「きり」の使用は、老年層、若年層のいずれにおいても認められたが、体言句に後接するものよりも使用地点数は少なく、若年層においては、ほとんどが「使用しない」としていた。従って、「しか」と交換可能な「きり」は、用言句に後接する場合においても、体言句に後接する場合と同様衰退の傾向にあることがわかる。また、『関東地方域方言事象分布地図』Map 136においては、使用地点はごくわずかであるが「しか」と交換可能な形式として「きりほか」、「だけきり」といっ

た形も存在している。前者は、「其他否定」を表す「ほか」によって反転的に限定されるものの存在を際立たせるために「きり」が「ほか」に前接した結果生まれ、後者は、「其他否定」を表す「きり」によって反転的に限定されるものの存在を際立たせるために「だけ」が「きり」に前接するようになった結果生まれたものと考えられる。

4.1.4. エ類：スキーマ的命題Xを具現化した属性を表す「きり」

エ類の用法は以下のようなものであり、限定の意味を含んでいるので、「きり」は知的意味を変えずに限定を表す「だけ」に交換することができる。

[エ類の「体言句+きり」の用法]

「体言句+きり」は、ある成分xと「[A. ある種の事物]とその属性」という意味関係で結ばれており、「成分x」についてのスキーマ的命題Xを具現化した属性を表す。

[エ類の「体言句+きり」に内在するスキーマ的命題X]

「[A. ある種の事物]が[B. ある領域]において「きり」に前接する体言句」に限定されている。

エ類の表現例には、以下の(55)-(58)のようなものがある。

付加的連用修飾成分

(55) 「私はこの父さんと、一度きり大衝突したことがあるの。」 (徳田秋声「縮図」)

必須的連用修飾成分

(56) 一列になって歩いていていた人たちは、一人減り二人減りして僕と同じ方角へ行くものは数人きりになった。 (井伏鱒二「黒い雨」)

連体修飾成分

(57) 「姐御、お眼ざめですかい。あんなやつはねえでしょう。相変わらず口がわるいね。」
といて、二間ッきりの奥の間から、出てきたのは、 (林不忘「丹下左膳」)

述語成分

(58) 「(省略)君はあの時自分で言ったごとく、まったく活動の人だ。ぜひとも活動してもらいたい」

「無論大いに遣る積りだ」

平岡の答はただこの一句ぎりであった。 (夏目漱石「それから」)

付加的連用修飾成分として現れる(55)の「体言句+きり」は被連用修飾成分と、必須的連用修飾成分として現れる(56)の「体言句+きり」はガ格成分と、連体修飾成分として現れる(57)の「体言句+きり」は被連体修飾成分と、述語成分として現れる(58)の「体言句+きり」はガ格成分と、「[A. ある種の事物]とその属性」という意味関係で結ばれている。また、「体言句+きり」は、いずれも[A. ある種の事物]に相当する「成分x」についての、「成分x」が[B.

ある領域]において「きり」に前接する体言句」に限定されているという属性を表している。例えば、(57)の「二間ッきり」は、「奥の間」についての、「奥の間」が当座の場面領域において「二間ッきり」に限定されているという属性を表している。また、(58)の「この一句ぎり」は、「平岡の答」についての、「平岡の答」が当座の場面領域において「この一句ぎり」に限定されているという属性を表している。

『東京都言語地図』文法1図(調査時期:1985)¹⁹が示す、述語成分として用いられるこの種の「きり」の使用分布では、老年層のほとんどが「使用する」であるのに対し、若年層では「使用しない」が「使用する」を幾分上回っていることから、東京都では、現在この種の「きり」は衰退の傾向にあるとみることができる。

次に、エ類の「きり」の発生源についてであるが、『方言文法全国地図1』47図(調査時期:1979-1983)²⁰においては、付加的連用修飾成分として用いられる場合のこの種の「きり」の使用地点のほとんどは、近畿方言圏から東西に同程度離れている長野、愛媛の各県に集中している。方言圏論的な見方をすれば、これら東西の使用域のほぼ中間に位置する近畿方言圏においてこの種の「きり」が発生したという仮説が立てられるが、関東方言圏でこの種の「きり」が見られるようになる近代よりも前に、近畿方言圏、及びその周辺域でこの種の「きり」が使用されていたことを示す言語資料は現在のところ見つかっていない。

現在に残る近世上方語の言語資料のほとんどは、近世前期に集中しており、比較的豊富な近世前期上方語の言語資料においてこの種の「きり」が発見されていないことからすると、残存する言語資料の少ない近世後期上方語においてこの種の「きり」が発生したという可能性も存在する。しかしながら、仮に、そうであったとしても、近世後期上方語において限定用法の「だけ」が勢力を増しつつあったことを考慮すると、この地域におけるこの種の「きり」の定着度は極めて低かったと考えられる。よって、この種の「きり」は、「だけ」の勢力がまだそれほど強くなかった近畿方言圏の周辺へと定着度を高めながら、使用域を拡大させていったが、後を追って近畿方言圏の周辺へと拡大していった「だけ」の勢力には勝てず、全国的な共通語としての地位を獲得するまでには至らなかったものとみることができる。

最後に、この種の用法が派生された意味的要因としては以下のような要因が考えられる。

近世において用いられた、「体言句+きり」の中には、従来の用法の意味に付随してエ類の用法の意味が現れているものも存在する。例えば、近世に見られた(33)の「室の酢煎それも二つ切」は、「焼物」の存在が許されている数量的範囲を表すと同時に、エ類の用法における〔A. ある事物〕に相当する「焼物」についての、「焼物」が〔B. ある領域〕に相当する「ある食事の席」において、「室の酢煎それも二つ」に限定されているという属性をも表している。従って、エ類の用法は、(33)のような表現例において従来の用法に付随して発生したエ類の用法の意味が、従来の用法の意味が存在しない「体言句+きり」と単独で結びつくようになった結果派生された可能性が高い。

4.1.5. オ類：スキーマ的命題Yを具現化した属性を表す「きり」

オ類の用法は以下のようなものであり、エ類と同様、限定の意味を含んでいるので、「きり」は知的意味を変えずに限定を表す「だけ」に交換することができる。

[オ類の「体言句+きり」の用法]

「体言句+きり」は、ある成分xと「[A. ある領域]とその属性」という意味関係で結ばれており、「成分x」についてのスキーマ的命題Yを具現化した属性を表す。

[オ類の「体言句+きり」に内在するスキーマ的命題Y]

[B. ある種の事物]が[A. ある領域]において「きり」に前接する体言句に限定されている。

オ類の表現例には、以下の(59)-(62)のようなものがある。

連体修飾成分

(59) 彼は真紀子から視線をそらせているものの、ただ二人きりの密房の中の沈黙は重苦しい刺戟を増すばかりだった。(横光利一「旅愁」)

(60) 一間きりの作爺さんの家に、上り込んで唖鳴っている武士は、(林不忘「丹下左膳」)

述語成分

(61) 色のベタベタにじんんでいるような街路には、私と護謨靴家さんの店きりだ。(林芙美子「放浪記」)

(62) 七月の暑い陽ざしの下を通る女は、汚れた腰巻と、袖のない襦袢きりである。(林芙美子「放浪記」)

連体修飾成分として現れる(59)、(60)の「体言句+きり」は被連体修飾成分と、述語成分として現れるもののうち(61)の「体言句+きり」は二格成分と、(62)の「体言句+きり」はガ格成分と「[A. ある領域]とその属性」という意味関係で結ばれている。また、「体言句+きり」は、いずれも[A. ある領域]に相当する「成分x」についての、[B. ある種の事物]が「成分x」において「きり」に前接する体言句に限定されているという属性を表している。例えば、(59)の「二人きり」は、「密房の中」についての、人が「密房の中」において「二人」に限定されているという属性を表している。また、(61)の「私と護謨靴家さんの店きり」は、「色のベタベタにじんんでいるような街路」についての、人やそれに準ずるものが「色のベタベタにじんんでいるような街路」において「私と護謨靴家さんの店」に限定されているという属性を表している。

このようなオ類の用法が派生された意味的要因としては以下のような要因が考えられる。

オ類の用法については、エ類の用法の場合とは事情が異なり、オ類の用法の意味が付随している従来の用法の「体言句+きり」は存在しない。しかしながら、エ類とオ類は、「体言句+きり」の属性主体である「成分x」が以下に示すスキーマ的命題に現れている【ある種の事物】と【ある領域】のいずれかに相当し、「体言句+きり」が「成分x」についての以下のスキーマ的命題を具

現化した属性を表しているという点において類似している。

[エ類とオ類が共有している、「体言句+きり」に内在するスキーマ的命題]
[ある種の事物]が[ある領域]において「きり」に前接する体言句に限定されている。

従って、オ類の表現例がエ類のそれとほぼ同時期に現れていることを考慮すると、オ類は、上記のようなエ類との類似性により、エ類の派生に付随するような形で派生されていったものと考えられる。

4.1.6. カ類：スキーマ的命題Zを具現化した属性を表す「きり」

カ類の用法は以下のようなものであり、エ類、オ類と同様、限定の意味を含んでいるので、「きり」は知的意味を変えずに限定を表す「だけ」に交換することができる。

[カ類の「体言句+きり」の用法]
「体言句+きり」は、ある成分xと「[A. 特定の人物]とその属性」という意味関係で結ばれており、「成分x」についてのスキーマ的命題Zを具現化した属性を表す。

[カ類の「体言句+きり」に内在するスキーマ的命題Z]
[B. [A. 特定の人物]を含む人間]が[C. [A. 特定の人物]を含むある領域]において「きり」に前接する体言句に限定されている。

カ類の表現例には、以下の(63)-(68)のような表現例が存在する。

付加的連用修飾成分

- (63) 私は彼女の仕事の邪魔にならないように、いつものように彼女を其処に一人きり残しながら、
(堀辰雄「風立ちぬ」)
- (64) しかし相手はそれを聞いてはいない。ドアが彼の鼻先で閉じ、彼は廊下に一人きり残される。
(福永武彦「死の島」)
- (65) それは私達が二人きりで最初に共にする食事にしては、すこし侘しかった。
(堀辰雄「風立ちぬ」)

必須的連用修飾成分

- (66) 「少し二人きりにしといてやろう」と門番は言った。
(村上春樹「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」)
- (67) 私と妻はたった二人ざりになりました。
(夏目漱石「こころ」)

述語成分

- (68) 「住みこみで家事とか掃除とかをしてくれていたおばさん。とても良い人だったわ。三

年前に癌で亡くなっちゃったけど。おばさんが亡くなってからはずっと祖父と二人きりなの」
 (村上春樹「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」)

付加的連用修飾成分として現れるもののうち (63) の「体言句+きり」はヲ格成分と、(64), (65) の「体言句+きり」はガ格成分と、必須的連用修飾成分として現れるもののうち (66) の「体言句+きり」はヲ格成分と、(67) の「体言句+きり」はガ格成分と、述語成分として現れる (68) の「体言句+きり」はガ格成分と「[A. 特定の人物] とその属性」という意味関係で結ばれている。また、「体言句+きり」は、いずれも [A. 特定の人物] に相当する「成分 x」についての [B. [A. 特定の人物] を含む人間] が [C. [A. 特定の人物] を含むある領域] において「きり」に前接する体言句」に限定されているという属性を表している。例えば、(63) の「一人きり」は、「彼女」についての、「彼女」を含む人間が彼女の存在する「其処」において「一人」に限定されているという属性を表している。また、(68) の「祖父と二人きり」は、話者についての、話者を含めた人間が話者の家において「祖父と二人」に限定されているという属性を表している。

このようなカ類の用法が派生された意味的要因としては以下のような要因が考えられる。

カ類の用法も、オ類の用法と同様、カ類の用法の意味が付随している従来の用法の「体言句+きり」は存在しない。しかしながら、カ類は、「体言句+きり」が、「成分 x」についての、限定の意味を含んだ状態を表しているという点においてエ類やオ類と類似している。従って、カ類の表現例もエ類やオ類のそれとほぼ同時期に現れることを考慮すると、カ類は、このようなエ類やオ類との類似性により、エ類やオ類の派生に付随するような形で派生されていったものと考えられる。

4.1.7. ア類-カ類のまとめ

ア類-カ類の「きり」が現れる統語的環境と、ア類-カ類の「きり」の構文的意味をまとめると以下の表4のようになる。

表4 ア類-カ類の「体言句+きり」の文法的特徴

	統語的環境	構文的意味
ア類	〈〜ガ〉+〈〜キリ〉+述部	表1の連用2と同じ
イ類	〈〜ガ〉+〈〜ヲ〉+〈〜キリニ〉+スル	「〜キリ」と属性・属性主体という意味関係を結んでいる成分」の存在が許されている、あるいは義務付けられている、あるいは状況的、身体的に可能な時間的、数量的範囲
	〈〜ガ〉+〈〜キリニ〉+ナル	
	〜キリノ+被連体修飾成分	
	〈〜ガ〉+〜キリ	
ウ類	〈〜キリシカ〉+〜ナイ	「其他否定」により生じる反転的な限定の強調
	〈〜キリ〉+ナイ	「其他否定」
エ類	〈〜ガ〉+〈〜キリ〉+述部	「〜キリ」と属性・属性主体という意味関係を結んでいる成分」についてのスキーマ的命題Xを具現化した属性
	〈〜ガ〉+〈〜キリニ〉+ナル	

	～キリノ+被連体修飾成分	
	〈～ガ〉+～キリ	
オ類	～キリノ+被連体修飾成分	‘～キリ」と属性・属性主体という意味関係を結んでいる成分’についてのスキーマ的命題Yを具現化した状態
	〈～ニ〉+～キリ	
	〈～ガ〉+～キリ	
カ類	〈～ガ〉+〈～ヲ〉+〈～ニ〉+〈～キリ〉+残す etc.	‘～キリ」と属性・属性主体という意味関係を結んでいる成分’についてのスキーマ的命題Zを具現化した状態
	〈～ガ〉+〈～ニ〉+〈～キリ〉+残される etc.	
	〈～ガ〉+〈～キリデ〉+述部	
	〈～ガ〉+～キリ	

上記のうち、イ類、ウ類の一部の「きり」、及びエ類、オ類、カ類の「きり」は、限定を表す「だけ」に交換することができた。しかし、限定を表し、体言句に後接するすべての「だけ」が「きり」に交換可能であるわけではない。1で見た(8)や次の(69)、(70)においては、先に見たイ類、ウ類の一部の「きり」やエ類、オ類、カ類の「きり」の解釈が適用できず、「きり」は不自然となる。

(69) これは、あなた一人 {?きり/だけ} の所有物ではない。

(70) 太郎一人 {?きり/だけ} がこの案に反対している。

4.2. 用言句後接型

4.2.0. 近代以降における用言句後接型の「きり」の変種

近代以降の文学作品において使用が認められる用言句後接型の「きり」の変種は以下の通りである。

キ類 動詞のタ形で終わる補文に後接して接続助詞的に働き、キリ節が、3.2で示した〔キリ節に従属される文に内在するスキーマ的命題〕を具現化した事態が成立する直前を表しているもの。すなわち、3.2で示した動詞のタ形に後接する「きり」のうち接続助詞的な働きをしているもの。

ク類 動詞のタ形で終わる補文に後接して副助詞的に働き、キリ節が3.2で示した〔キリ節が表す付加的命題に内在するスキーマ的命題〕を具現化した付加的命題を表しているもの。すなわち、3.2で示した動詞のタ形に後接する「きり」のうち副助詞的な働きをしているもの。

ケ類 補文に後接して副助詞的に働き、キリ節補文の内容や前後の文脈から想定される何かは「キリ節補文」に限定されていることを表すもの。

以下、各類の用法について順に具体的に見ていく。

4.2.1. キ類：3. 2で示した接続助詞的な働きをする動詞タ形後接型の「きり」

キ類の表現例には、次の(71)、(72)のような表現例が存在する。

(71) 八月のある日、男が一人、行方不明になった。休暇を利用して、汽車で半日ばかりの海岸に出掛けたきり、消息をたってしまったのだ。(安部公房「砂の女」)

(72) 翌日からしばらくの間、ミーシャは玄関の所に坐ったきりぼんやりしていた。(五木寛之「風に吹かれて」)

例えば、(71)のキリ節は、3.2であげた[キリ節に従属される文に内在するスキーマ的命題]のAを具現化した‘消息をたってしまった’が成立する直前の時点を表している。また、(72)のキリ節は、同じく3.2であげた[キリ節に従属される文に内在するスキーマ的命題]のBを具現化した‘ぼんやりしていた’が成立する直前の時点を表している。

4.2.2. ク類：3. 2で示した副助詞的な働きをする動詞タ形後接型の「きり」

ク類の表現例には、次の(73) - (76)のような表現例が存在する。

(73) 「二十一日だ」とさぶが云った、「おめえ浅草の店を十五日に出た{つきり/*ダケ}だっというじゃねえか」(山本周五郎「さぶ」)

(74) お万阿は板敷の上に、ぺたりとすわった{きり/*ダケ}である。あまりのうれしさで放心してしまっている。(司馬遼太郎「国盗り物語」)

(75) 「砂で大変だ。着物が汚れます」
「ええ」と左右を眺めた{きり/ダケ}である。(夏目漱石「三四郎」)

(76) 「あなたは何方へ」と聞いた。
「東京」とゆっくり云った{きり/ダケ}である。(夏目漱石「三四郎」)

例えば、(73)のキリ節は、3.2であげた[キリ節が表す付加的命題に内在するスキーマ的命題]のAを具現化した、‘浅草の店を十五日に出た’が成立する時まで‘浅草の店’に存在した‘おめえ’が‘浅草の店’から消失しているという付加的命題を表している。また、(74)のキリ節は、‘お万阿は板敷の上に、ぺたりとすわった’が成立する時まで存在した‘お万阿’の動作が途切れているという付加的命題を表している。

なお、3.2.で見た近世における動詞のタ形に後接する副助詞的な「きり」は、キリ節自体を補文とする独立性の高い節を構成する接続助詞の直前に現れていたが、近代以降になると、(74)-(76)のように主文末に現れる例が多く見られるようになる。また、(75)、(76)においては、「きり」は「だけ」と交換することができるが、「だけ」を用いた場合には、先行発話に対する‘ガ格’の反応の種類が‘キリ節補文’に限定されていることを表す。

4.2.3. ケ類：何かが‘キリ節補文’に限定されていることを表す「きり」

ケ類の表現例には、以下の(77)-(82)のような表現例が存在する。

(77) 彼の道徳は何時でも自己に始まった。そうして自己に終るぎりであった。(夏目漱石「道草」)

(78) 「珍しい事。私に呑めと仰しゃった事は滅多にないのにね」
「御前は嫌だからさ。然し稀には飲むといいよ。好い心持になるよ」

「些ともならないわ。苦しいぎりで。(省略)」 (夏目漱石「こころ」)

(79) 中を覗くと天井も壁も悉く黒く光っていた。人間としては婆さんが一人居たきりである。

(夏目漱石「彼岸過迄」)

(80) 繭時にはまだ少し間のあるこの温泉場には、近郷の百姓や附近の町の人の姿が偶に見られるきりであった。

(徳田秋声「あらくれ」)

(81) 貧乏な父や母にはすがるわけにもゆかないし、と云って転々と働いたところで、月に本が一二冊買えるきりだ。

(林芙美子「放浪記」)

(82) もう薄暗くってそれとは定かに認めがたい位だが、彼女は何かをじっと見つめているらしい。しかし私がそれを気づかわしように自分の目で追って見ると、ただ空を見つめているきりだった。

(堀辰雄「風立ちぬ」)

例えば、(77) のキリ節は、‘彼の道徳’の展開の仕方が‘自己に終る’に限定されていることを表している。また、(78) のキリ節は、酒を飲んだ後の状態が‘苦しい’に限定されていることを表している。

キリ節補文の述語には、キ類、ク類のそれとは異なり、品詞やアスペクト・テンス形式についての制約は存在せず、また、いずれの場合も、「きり」は限定の意味を表しているので「だけ」との交換が可能である。

『東京都言語地図』文法2図(調査時期：1985)²¹のこの種の「きり」の使用分布では、老年層では「使う」が「使わない」をやや上回っているのに対し、若年層ではほとんど「使わない」としていることから、東京都では、現在この種の「きり」は衰退の傾向にあるとみることができる。

次に、この種の「きり」の発生源についてであるが、『方言文法全国地図1』49図(調査時期：1979-1983)²²においては、この種の「きり」の使用地点は、近畿方言圏から東西にほぼ同程度離れている福島、長野、山梨、静岡、愛媛の各県内の一部の地域に限られている。方言圏論的な見方をすれば、これら東西の使用域のほぼ中間に位置する近畿方言圏においてこの種の「きり」が発生したという仮説が立てられるが、関東方言圏でこの種の「きり」が見られるようになる近代よりも前に、近畿方言圏、及びその周辺域でこの種の「きり」が使用されていたことを示す言語資料は現在のところ見つかっていない。

現在に残る近世上方語の言語資料のほとんどは、近世前期に集中しており、比較的豊富な近世前期上方語の言語資料においてこの種の「きり」が発見されていないことからすると、残存する言語資料の少ない近世後期上方語においてこの種の「きり」が発生したという可能性も存在する。しかしながら、仮に、そうであったとしても、近世後期上方語において限定用法の「だけ」が勢力を増しつつあったことを考慮すると、この地域におけるこの種の「きり」の定着度は極めて低かったと考えられる。よって、この種の「きり」は、「だけ」の勢力がまだそれほど強くなかった近畿方言圏の周辺へと定着度を高めながら、使用域を拡大させていったが、後を追って近畿方言圏の周辺へと拡大していった「だけ」の勢力には勝てず、全国的な共通語としての地位を獲得するまでには至らなかったものとみることができる。

最後に、この種の「きり」が派生された意味的要因であるが、(75)、(76)のような限定を表す

「だけ」と交換可能なク類の「きり」の存在や、イ類、ウ類の一部、及びエ類、オ類、カ類のような限定の意味を含む体言句後接型の「きり」の存在が関与しているものと考えられる。

5. さいごに

以上、拘束形態素として用いられる「きり」のうち、付属語性の高い「きり」の用法の変遷について江戸語・東京語を中心に考察を行ってきた。その結果、近世前期においては、付属語の「きり」は主に体言句に後接して修飾成分を構成し、被修飾成分が表す事物の存在が許されている、あるいは義務付けられている期限を表すのに使用されていたこと、近世後期江戸語には、動詞のタ形に後接し、キリ節に従属される節が表す事態の成立する直前を表したり、何かがある時点を境にある空間から消失する（消失している）、あるいはある特定の動きがある時点を境に途切れる（途切れている）ことを付加的に表したりする「きり」が現れたこと、近代以降の文学作品においては、新たな用法として限定の意味を含んだある種の属性を表す「きり」が見られること、旧用法から新用法が派生された意味的要因などが明らかとなった。

なお、『日本方言大辞典上』(p.718)には、現在、東京以外の特定の地域でのみ使用が認められる付属語の「きり」として、以下の①-⑤のようなものがあがっている。

- ① 限定された状態が続く「ばかり」の意をもつもの
ex. 愛媛県「ごぶさたぎりしとりますのじゃが」
- ② 程度を表す「ほど」、「くらい」の意を持つもの
ex. 埼玉県秩父郡「十円きし（ほど）くんねえ」
- ③ 動作などの及ぶ範囲を表す「まで」の意を持つもの
ex. 茨城県稲敷郡「どっきし（どこまで）」
- ④ そのもの一つ一つ、その時その時を表す「ごと」、「たび」の意を持つもの
ex. 宮城県栗原市「一年ぎりに（一年ごとに）大きくなる」
- ⑤ 仮定条件や確定条件を表す「ならば」、「すると」の意を持つもの

ex. 熊本県南部「俺らば打つぎりただじゃおかん」、佐賀県「君が行くぎ一僕も行かう」
また、本稿で取り上げた付属語性の高い「きり」は、強弱の差はあるが、1であげた(1)のような自由形態素の「きり」や(2)、(3)のような拘束形態素ではあるが付属語性の低い「きり」や次の(83)、(84)のように「着たきり」、「寝たきり」という形で慣用化した特定の意味²³を表す「きり」とも互いに派生関係を持っている。

(83) その日は大へん気分もよさそうで、いつも殆ど着たきりの寝間着を、めずらしく青いブラウスに着換えていた。
（堀辰雄「美しい村」）

(84) 近頃、寝たきりだったので食欲が衰え、やや痩せの目立つようになった節子は、
（堀辰雄「風立ちぬ」）

これらの「きり」と本稿で考察した「きり」との派生関係については、今後の研究課題とする。

付 記

本稿は、広島女学院大学文学部日本語日本文学科第56回研究会、及び国語学会中国四国支部第47回大会の研究発表の内容をまとめたものである。発表の席上では多くの方々から、たいへん貴重なご意見を賜ることができました。この場を借り心より感謝の意を表します。

注

- 1 (4)-(6)のうち、(4)、(5)の「きり」は副助詞的に、(6)の「きり」は接続助詞的に用いられており、いずれも学校文法において付属語として分類されている品詞と同じ文法機能を果たしている。ただし(4)については、(2)、(3)と同様、自立語の直接構成要素とみられることも可能であり、この点において、(5)、(6)と比べると付属語性はやや低い。
- 2 日本古典文学作品本文データベースは、岩波書店刊行の旧版『日本古典文学大系』の全作品の本文(テキスト)をデータベース化したもので、国文学研究資料館で管理されている。
- 3 現代では「ぎり」より「きり」の方がよく使用される傾向にあるが、倉持によれば近世においては一般に「ぎり」が用いられていたということである。
- 4 『時代別国語大辞典 室町時代編二』にあがっていた表現例は以下の通り。
(i) 九百文 八九十三ヶ月分、八月廿五日より同晦日を切而可請取
(相州文書 元亀二、八、卅、定)
- 5 『時代別国語大辞典 室町時代編二』にあがっていた表現例は以下の通り。
(i) 臣下タル者ハ皆歳年ヲ限テ朝(=期)満レバ交代スル者ナレドモ (史記抄・九)
- 6 検索にあたっては、「きり」、「ぎり」、「切」をキーワードとして検索を行った。(28)、(29)の「限り」については、「古典104」において「ぎり」と振り仮名が付けられていたものである。
- 7 本稿における構文的意味とは、文中において他の成分との意味関係により特徴づけられるある特定の成分の意味のことをいう。
- 8 連用2の構文的意味のところに記した「ある特定のスキーマ的命題」の内容については後述する。
- 9 連用2の「～キリガ」の「ガ」は、『日本古典文学大系』の注釈によれば、「くらい」、「ほど」といった程度を表す「～ガトコ」の意を表す。
- 10 本稿では、享保、宝暦(1716～1764)を近世中期とし、近世におけるこれより前の時期を近世前期、これより後の時期を近世後期とする。
- 11 近世前期においては、次の(i)のような「期限」の意味で用いられる自由形態素の「きり」が現れることから連用1や連体1は、このような「きり」とも派生関係にあったとみることができる。
(i) 堺にて切ある薬物を買掛り、拾貫目の物四貫目売損して遣ふ (好色二代男・八・三)
- 12 本稿においては、恒常的であるか一時的であるか否かに関わらず、何かについての特性や様態を表すのに属性という用語を用いる。
- 13 山口(1991:p.36)は、「～しか～ない」や「～ほか～ない」といった「その他を否定することによる反転的な限定の表現」を「其他否定」の表現と呼んでいる。
- 14 調査に用いられた質問は、以下の通り。
(i) 「百円しかない」と言うときにはどのように言いますか。
- 15 調査に用いられた質問は、以下の通り。
(i) 「これしかない。」という言いかたはどうなりますか。

- 16 調査に用いられた質問は、以下の通り。
 (i) 「たった二つしかない」フタツッキリ (フタツキリ) を使うか
- 17 宮地 (1997 : p.49) でも取り上げられているが、近世後期に書かれた『甲子夜話』には、以下の (i) のような「其後否定」と「其他否定」の両解釈が可能な「きり」が存在する。
 (i) もう爰の内もこん夜ぎりこられね (甲子夜話)
- 18 調査に用いられた質問は、以下の通り。
 (i) 「あとは行くしかない」イクッキリを使うか
- 19 調査に用いられた質問は、以下の通り。
 (i) 「あるのは卵だけだ」タマゴッキリダを使うか
- 20 調査に用いられた質問は、以下の通り。
 (i) 「まんじゅうを皮だけ食べた」と言うときの「皮だけ食べた」のところはどのように言いますか。
- 21 調査に用いられた質問は、以下の通り。
 (i) 「あとは行くだけだ」イクッキリを使うか
- 22 調査に用いられた質問は、以下の通り。
 (i) 「食って寝るだけなら、犬や猫と同じだ」と言うときの「食って寝るだけなら」のところはどのように言いますか。
- 23 (83) の「着たきり」は、「ある人物が同じ着物を来る日も来る日もずっと着ている」という慣用化した特定の意味を表し、(84) の「寝たきり」は、「ある人物が病のために来る日も来る日も床に臥した状態である」という慣用化した特定の意味を表している。

参考文献

- 大橋 勝男 (1976) 『関東地方域方言事象分布地図』第2巻 桜楓社
- 大橋 勝男 (1990) 『関東地方域の方言についての方言地理学的研究』第2巻 桜楓社
- 奥津 敬一郎他 (1986) 『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 倉持 保男 (1969) 「四 だけ一副助詞〈現代語〉」松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』學燈社
- 倉持 保男 (1969) 「七 きり(ぎり)一副助詞〈現代語〉」松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』學燈社
- 国立国語研究所編 (1951) 『国立国語研究所報告3 現代語の助詞・助動詞一用法と実例一』秀英出版
- 国立国語研究所編 (1989) 『国立国語研究所報告97-1 方言文法全国地図1 一助詞編一』大蔵省印刷局
- 此島 正年 (1966) 『国語助詞の研究一助詞史素描一』桜楓社
- 阪田 雪子 (1969) 「十五 しか (付 ほか) 一副助詞〈現代語〉」松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』學燈社
- 尚学図書編 (1989) 『日本方言大辞典上』小学館
- 武田 蓉子 (1970) 「副助詞『だけ、ばかり、くらい、ほど、きり、しか』の意義素」山形大学教育学部編『国語研究』21
- 田中 章夫 (1995) 『「一つハッチャない」から「一つツキヤない」まで一江戸語東京語の限定の表現一』『日本近代語研究2』ひつじ書房
- 東京都教育委員会編 (1986) 『東京都言語地図』東京都教育委員会
- 中西 久美子 (1995) 「シカとダケとバカリ」宮島達夫他編『日本語類意表現の文法(上)一単文編一』

くろしお出版

- 中村 幸彦他編 (1984) 『角川古語大辞典』第2巻 角川書店
日本語教育学会編 (1982) 『日本語教育事典』大修館書店
根来 司 (1967) 「(副助詞 現代語) きり」 『國文學 解釈と教材の研究』12-2學燈社
根来 司 (1967) 「(副助詞 現代語) だけ」 『國文學 解釈と教材の研究』12-2學燈社
宮地 朝子 (1997) 「係助詞シカの成立—(其他否定)の助詞の歴史的変遷に見る—」名古屋大学 国語国文学会編 『名古屋大学国語国文学』81
宮地 朝子 (2000) 「方言から見たシカの構文的特徴と成立過程」 『国語学』201
室町時代語辞典編集委員会編 (1989) 『時代別国語大辞典 室町時代編二』三省堂
山口 明徳他編 (2001) 『日本語文法大辞典』明治書院
山口 堯二 (1991) 「副助詞『しか』の源流—その他を否定する表現法の広がり—」日本語語源研究会編 『語源探求』3 明治書院
山田 正紀 (1936) 『江戸言葉の研究』武蔵野書房
湯澤 幸吉郎 (1936) 『徳川時代言語の研究』刀江書院
湯澤 幸吉郎 (1954) 『増訂 江戸言葉の研究』明治書院

「古典104」の作品名

(付属語「きり」の存在した作品には下線を引いた。なお近世前期の作品については二重下線を引いた)

好色一代男(47巻) / 好色五人女(47巻) / 好色一代女(47巻) / 日本永代藏(48巻) / 世間胸算用(48巻) / 西鶴織留(48巻) / 曾根崎心中(49巻) / 堀川波鼓(49巻) / 重井筒(49巻) / 丹波與作待夜の小屋節(49巻) / 五十年忌歌念佛(49巻) / 冥途の飛脚(49巻) / 夕霧阿波鳴渡(49巻) / 大経師昔暦(49巻) / 鑓の權三重帷子(49巻) / 山崎與次兵衛壽の門松(49巻) / 博多小女郎波枕(49巻) / 心中天の網島(49巻) / 女殺油地獄(49巻) / 心中宵庚申(49巻) / 出世景清(50巻) / 用明天王職人鑑(50巻) / けいせい反魂香(50巻) / 嫗山姥(50巻) / 國性爺合戦(50巻) / 平家女護嶋(50巻) / 附載近松の言説(50巻) / 頼光跡目論(51巻) / 八百屋お七(51巻) / ひらかな盛衰記(51巻) / 夏祭浪花鑑(51巻) / 假名手本忠臣蔵(51巻) / 源平布引滝(52巻) / 新版歌祭文(52巻) / 鎌倉三代記(52巻) / 伽羅先代萩(52巻) / 傾城壬生大念仏(53巻) / 幼稚子敵討(53巻) / 韓人漢文手管始(53巻) / 名歌徳三舛玉垣(54巻) / お染久松色読販(54巻) / 小袖曾我薊色縫(54巻) / 雨月物語(56巻) / 春雨物語(56巻) / 膽大小心録(56巻) / 黄表紙本 金々先生栄花夢(59巻) / 黄表紙本 高漫齋行脚日記(59巻) / 榮花程五十年蕎麦価五十銭見徳一炊夢(59巻) / 黄表紙本 手前勝手御存商売物(59巻) / 黄表紙本 御手料理御知而已 大悲千祿本(59巻) / 黄表紙本 巡廻能名題家 莫切自根金生木(59巻) / 黄表紙本 江戸生艶気樺焼(59巻) / 黄表紙本 文武二道万石通(59巻) / 黄表紙本 孔子竊干時藍染(59巻) / 黄表紙本 大極上請合壳心学早染艸(59巻) / 黄表紙本 敵討義女英(59巻) / 洒落本 遊子方言(59巻) / 洒落本 辰巳之園(59巻) / 洒落本 軽井茶話道中粹語録(59巻) / 洒落本 卯地臭意(59巻) / 洒落本 通言総籙(59巻) / 洒落本 傾城買四十八手(59巻) / 洒落本 青楼昼之世界錦之裏(59巻) / 洒落本 傾城買二筋道(59巻) / 椿説弓張月(60巻) / 椿説弓張月(61巻) / 東海道中膝栗毛(62巻) / 浮世風呂(63巻) / 春色梅兒譽美(64巻) / 春色辰巳園(64巻) / 犬枕(90巻) / 恨の介(90巻) / 竹齋(90巻) / 仁勢物語(90巻) / 夫婦宗論物語(90巻) / 浮世物語(90巻) / 伊曾保物語(90巻) / 好色万金丹(91巻) / 傾城禁短気(91巻) / 新色五巻書(91巻) / 矢の根(98巻) / 助六(98巻) / 暫(98巻) / 鞘當(98巻) / 勸進張(98巻) / 鳴神(98巻) / 毛拔(98巻) / 景清(98巻) / 役者論語(98巻) / 菅原伝授手習鑑(99巻) / 義經千本櫻(99巻) / 一谷嫩軍記(99巻) / 妹背山婦女庭訓

(99卷)／艶容女舞衣(99卷)／摂州合邦辻(99卷)／伊賀越道中雙六(99卷)／繪本太功記(99卷)／きのふはけふの物語(100卷)／鹿の巻筆(100卷)／軽口露がはなし(100卷)／軽口御前男(100卷)／鹿の子餅(100卷)／聞上手(100卷)／鯛の味噌津(100卷)／無事志有意(100卷)

(投稿受理日：2001年12月25日)

渡邊 ゆかり (わたなべ ゆかり)

広島女学院大学文学部 日本語日本文学科

〒732-0063 広島市東区牛田東4-13-1

watanabe@gaines.hju.ac.jp

Changes in the usage of Japanese grammatical word *KIRI*: The formation process of grammatical *KIRI* in the language of modern Tokyo

WATANABE Yukari
Hiroshima Jogakuin University

Keywords

KIRI, DAKE, SHIKA, Grammatical word, Derivation

Abstract

The purpose of this paper is to explain how usage of the Japanese grammatical word *KIRI* has changed from the Tokugawa period to the present time. The Japanese grammatical word *KIRI* appeared in Osaka and its neighborhood in the early Tokugawa period. The *KIRI* during this period was attached behind a noun phrase, such as “Misoka giri ni yatoware,” (Someone was permitted to work within thirty days by his employer,)” and mainly represented a temporal range within which something is permitted or obligated to do or to be, namely a time limit. But in the late Tokugawa period, *KIRI* representing a quantitative range, such as “Futatsu giri (Within two pieces)”, was often used. And *KIRI* representing a range within which it is possible for something to be or to be done, such as “Shooben wa sore giri” (The quantity of my urine was only it.) “also appeared. During this period, *KIRI* behind *TA*-form verbs such as, “Chokkuri kao o dashita giri de, (Someone has not visited somewhere since his last visit to there,)” also appeared. This use of *KIRI* implies that something disappeared or that some action stopped. After the Tokugawa period, new usages were derived from old usages. Some new usages of *KIRI* attached behind a noun phrase, for example, “Kore kiri nai. (I have only this.)” and “Kore kiri shika nai. (I have only this.)”, are related to *SHIKA*, meaning to deny others. Other new usages of *KIRI* behind a noun phrase are, for example, “Futama kiri no okunoma (An inner space where only two rooms are)” and “Futari kiri no mitsuboo (A secret room where only two peoples are)” etc., related to the proposition that something is limited to “~kiri” in a domain. Moreover, *KIRI* attached behind a verb or an adjective, meaning that something to be contextually supposed is limited, appeared. An example is “Kanojo wa sore o mitsumete iru giri da. (She only gazes at it.)”